グローバル教育における「異文化理解」の重要性
―学生の意識調査から見える「異文化」とは―

坂 根 シルック

Intercultural Understanding as an Essential Part of Global Education
－From a Student Survey on “Intercultural Understanding”－

Sirkku Sakane

１．はじめに

2011年５月、『我が国の成長の牽引力となるべき「グローバル人材」の育成と、そのような人材が社会で十分に活用される仕組みの構築を目指して』新成長戦略実現会議の下に関係閣僚からなる「グローバル人材育成推進会議」が設置された。そして翌年の2012年、内閣府国家戦略室は国家戦略の一環として「グローバル人材育成戦略」（グローバル人材育成推進会議、中間まとめ、審議まとめ）を公表した。その中で『グローバル化した世界の経済・社会の中にあって育成･活用していくべき「グローバル人材」の概念』として次の要素が挙げられた：

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

又、『幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等』が挙げられ、語学力を、コミュニケーションの「道具」と捉えた上で、海外旅行会話レベルから多数者観折衝・交渉レベルまで、５つの段階に分けた。更に、『我が国の経済的な発展と国際社会との関わり』の中では、『海外に目を向けて「世界の中の日本」を明確に意識するとともに、自らのアイデンティティを見つめ直すことが不可欠なのではないか』と示した。

グローバル人材の概念が明確に定義されたわけではないが、その後、文部科学省が展開するグローバル人材育成事業においてこれらの要素が活用されるようになったようだ。（筆者が前職で関わっていた「博士課程教育リーディングプログラム」も、文部科学省のグローバル人材育成事業の一環として日本学術振興会が行っていたプログラムだ。）

グローバル化が進むと共に「異文化理解」という言葉も教育現場や民間企業、そして徐々に社会の様々な場面においても使われるようになったが、「異文化」とは何を意味しているのだろうか。又、グローバル教育を実施する上で、「異文化」という概念をどのように理解すべきなのだろうか。

単一民族とされてきた日本では一般的に「異文化」を「外国の文化」として捉えられることが多いようだが、大学に入学して間もない学生たちは、今までの暮らしの中でどのような「異文化」に触れてきており、「異文化」をどのように捉えているのだろうか。また、そこから何が見えてくるのだろうか。

本稿では、上記の「グローバル人材」の要素Ⅲの「異文化に対する理解」を取り上げ、昨年度と今年度の２回、九州ルーテル学院大学の１年生を対象に行った「異文化に対する意識調査」を通して、グローバル教育における異文化理解の必要性について考えていきたい。

２．文化と異文化

先ず「文化」の定義について考えたい。文化は大きく「トータル・カルチャー（全体文化）」と「サブ・カルチャー」の二つに分けられる[1]。一般的には「日本文化」や「中国文化」など、国単位の「トータル・カルチャー」として、時にはもっと広く「欧米の文化」や「アジアの文化」など、地域として捉えられることが多いのではないだろうか。そして国民性について述べる場合も、「トータル・カルチャー」を基準にステレオタイプを取り上げ、「日本人は～」「韓国人は～」とくくられる。

しかし、この「トータル・カルチャー」の中にも様々な文化が存在しているのが現状である。単一民族と言われ、同質性が求められてきた日本においても、今年の４月、法律上初めて先住民族として認められたアイヌの人々や、琉球民族、在日韓国・朝鮮人など、日本人とは異なる文化や言語を持っている複数の民族が共存していることを考えると、その人々が少数派であるにせよ、日本も多文化社会だと言えるのではないだろうか[2]。また、同じ日本人同士でも、様々な違いがあることは誰もが経験していることだろう。大学生を例に考えると、地域・大学・学部・学科・専攻・学年・年齢・ジェンダー・サークルなど、いくつものサブ・カルチャーに分けることができる。そしてそれぞれに独自の「文化」があり、他のサブ・カルチャーからは「異文化」として認識されるのではないだろうか。

次に「異文化」について考えたい。「異文化」と聞くと先ず思い浮かぶのは外国の文化、「トータル・カルチャー」ではないだろうか。異文化をテーマに書かれている文献においても、外国の「トータル・カルチャー」を異文化として捉えているものが圧倒的に多いようだ。では、日本語国語辞典は「異文化」をどのように説明しているのだろうか。広辞苑（岩波書店）は「生活様式や宗教などが自分の生活圏と異なる文化」、大辞林（三省堂）は「価値観や言語、習慣や行動様式など、自分が親しんでいる文化とは規範・営みの異なる文化」と定義している。どちらの定義にも「国」という言葉は含まれていないにも関わらず、一般的に「異文化」は国単位での「トータル・カルチャー」として捉えられる傾向にあるようだ。

３．意識調査の目的

九州ルーテル学院大学人文学科のキャリア・イングリッシュ専攻で来年度（2020年度）から開設される「異文化理解」の新カリキュラムに先立ち、１年生の学生たちが異文化についてどのように理解しているのか、どのような体験があるのかを質問紙調査した。2018年度はゲストティーチャーとして、又今年度（2019年度）は人文学科教員の一人として、１年生の前期の必修科目「グローバルスタディーズ」において『異文化コミュニケーションと国際理解』をテーマに講義を行った。その際、学生たちに無記名方式の質問紙調査を実施し、彼らの「異文化」に対する意識や体験について調査した。

3.1. 調査対象者と回答率

2018年度は１年生の「グローバルスタディーズ」履修登録者184名のうち151名の回答を得ることができた（回答率82%、学科別データ無し）。2019年度においては１年生の履修登録者193名中190名が回答した（内訳：人文学科109名中107名、心理学科84名中83名、回答率98%）（表１）。

表１　調査対象者と回答率

	人文学科			心理学科			学年全体		
年度	履修者	回答数	回答率	履修者	回答数	回答率	履修者	回答数	回答率
2018	（学科別データ無し）						184	151	82%
2019	109	107	98%	84	83	99%	193	190	98%

４．意識調査と結果

4.1. 異文化圏体験の有無について

初めに、学生が熊本県出身者かどうかを尋ねた。その結果、2018年度は92%（151名中139名）、2019年は平均して約93%（190名中176名）の学生が地元熊本出身者ということが分かった（図１）。本学の学生の大半は熊本県出身者であるため、調査対象のキャリア・イングリッシュ専攻の学生も本学の典型的な学生像にあてはまることになる。

次に、他の都道府県で暮らした経験の有無について尋ねた。その結果、2018年度は約79%（151名中119名）の、2019年度は平均して約78%（190名中149名）の学生が地元熊本以外の地域で暮らした経験がない

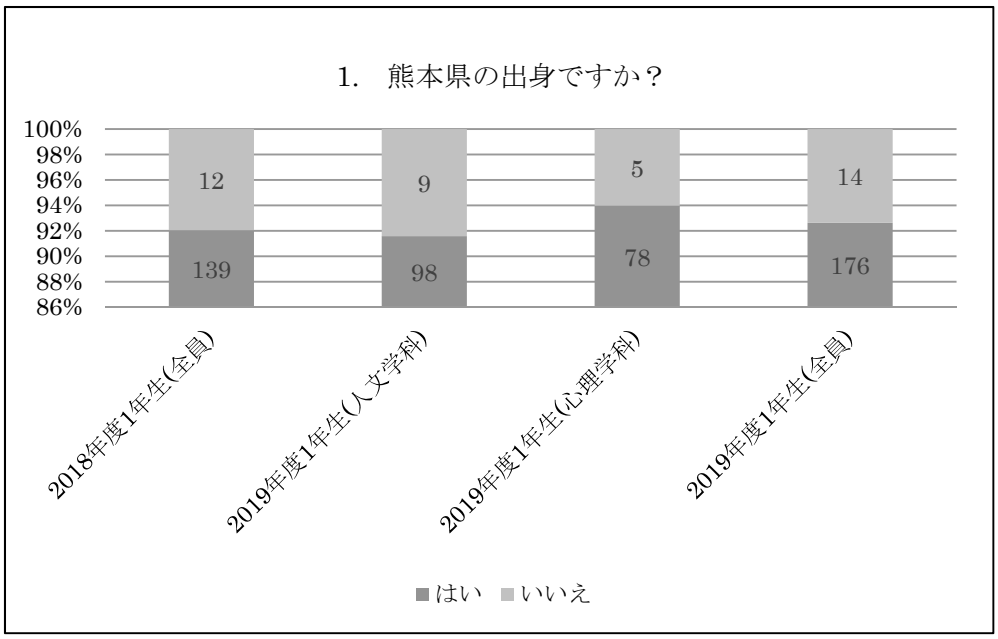

図１　出身県について

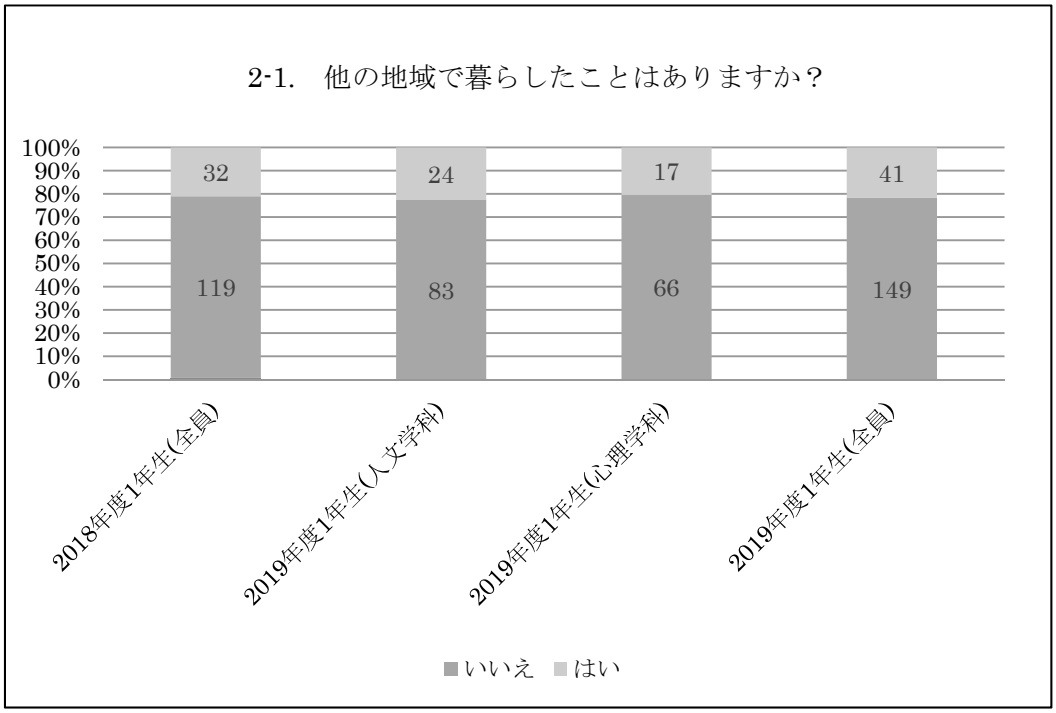

図２　他県で暮らした経験の有無について

ことが判明した（図２）。

他地域で暮らした経験がある人には更に都道府県名についても尋ねたところ、九州の他県や沖縄で暮らしたことのある学生はどちらの年度も平均して56％だった（2018年度は32名中18名、2019年度は41名中23名）（図３）。そして他地域で生活した経験の

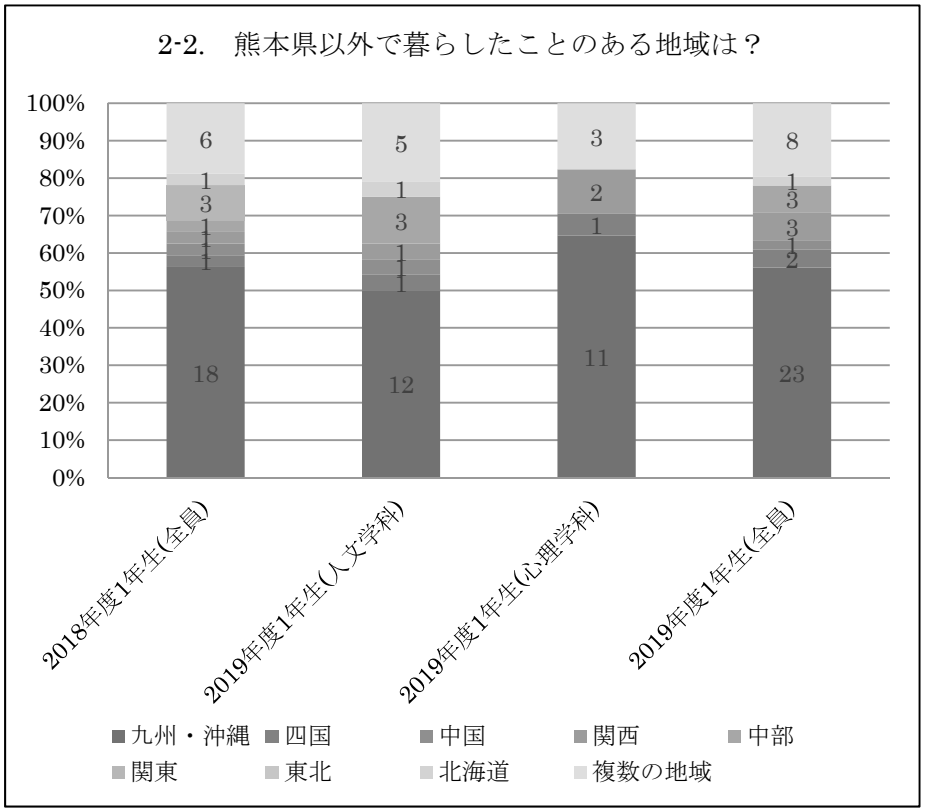

図３　熊本県外で暮らした地域について

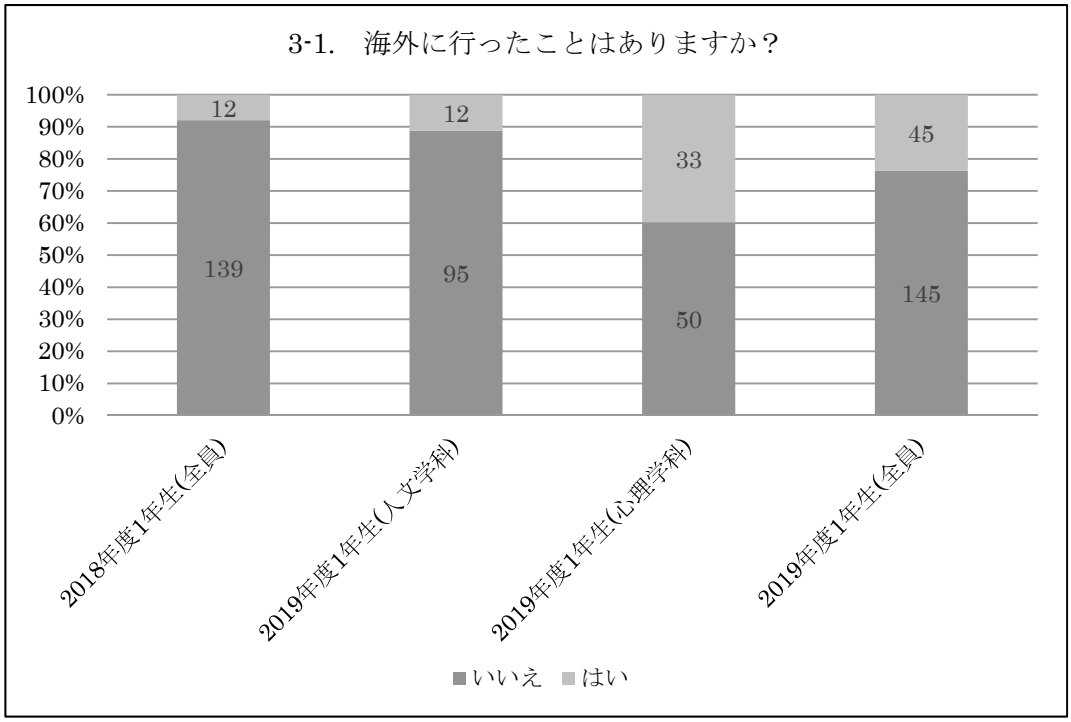

図４　海外渡航の有無について

ある学生でも、半数以上が九州以外での生活経験がないことがわかった。また、東北地域で暮らした経験のある学生は一人もいなかった。

次に海外渡航歴について尋ねた。2018年度は約８％（151名中12名）の学生だけが海外渡航の経験があったのに対し、2019年度は平均して約24％（190名中45名）もの学生が海外渡航を経験していた（図４）。尚、今回は海外渡航の長さや目的については調査していない。

渡航先について、最も多かったのはアジアで、2018年度は51％（47人中24名）、2019年度は平均して約53％（73名中39名）と、約半数の学生がアジア諸国を訪問した経験があることがわかった（図５）。また複数の国を訪れた経験のある学生も、2018年度は約21％（47名中10名）、2019年度は平均して約29％（73名中21名）と、比較的多かった。アフリカ大陸及び南米大陸に行ったことのある学生はいなかった。

全体を通して見てみると、熊本以外の（国内）地域及び海外のどちらにおいても異文化を体験している学生は、2018年度は約8％（151名中12名）、2019年度は平均して約9％（190名中18名）と両年度とても少なかったのに対し、熊本県外で生活をした経験がない、言い換えれば「地元を出たことがない」学生は、2018年度は約56％、2019年度は約49％と、どちらも半数近くを占めていた（図６）。

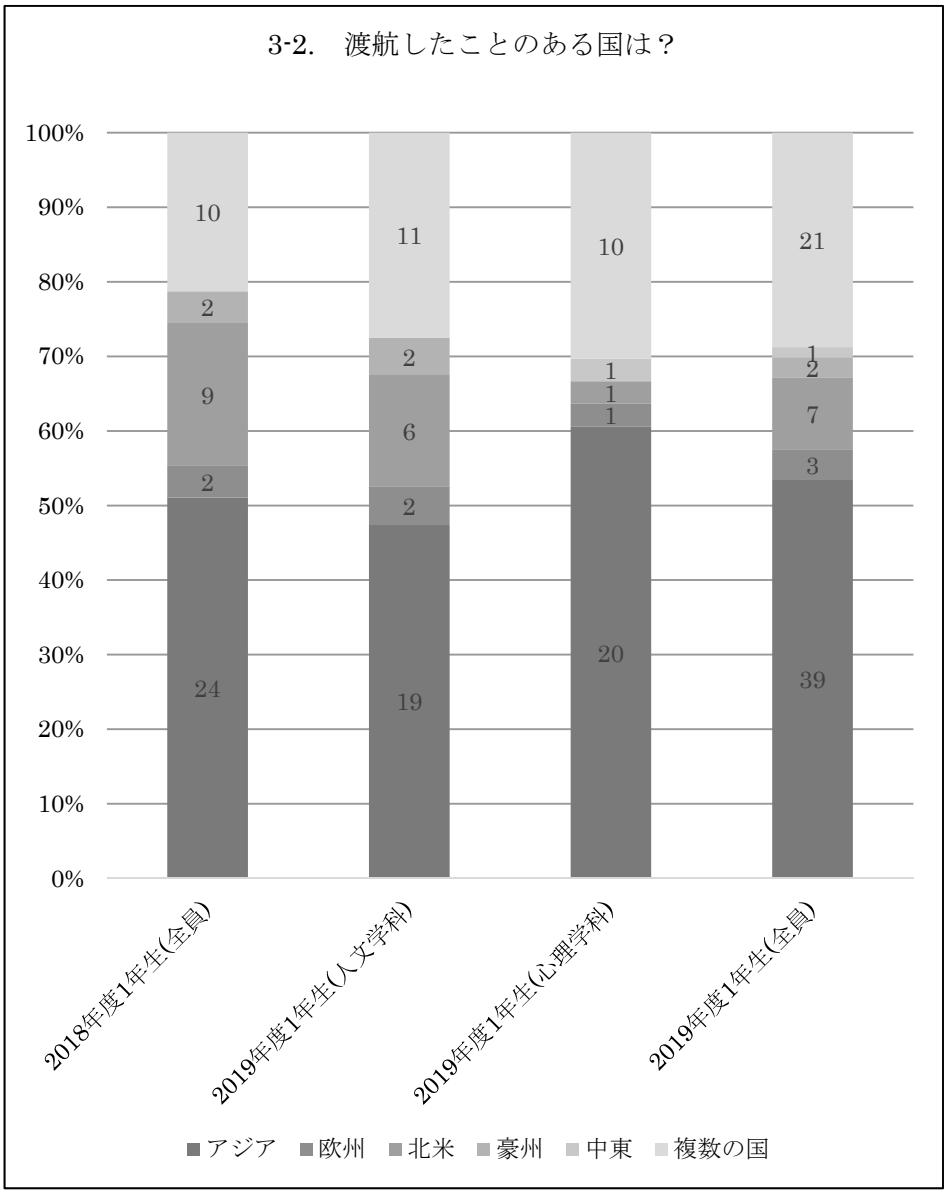

図５　海外渡航先について

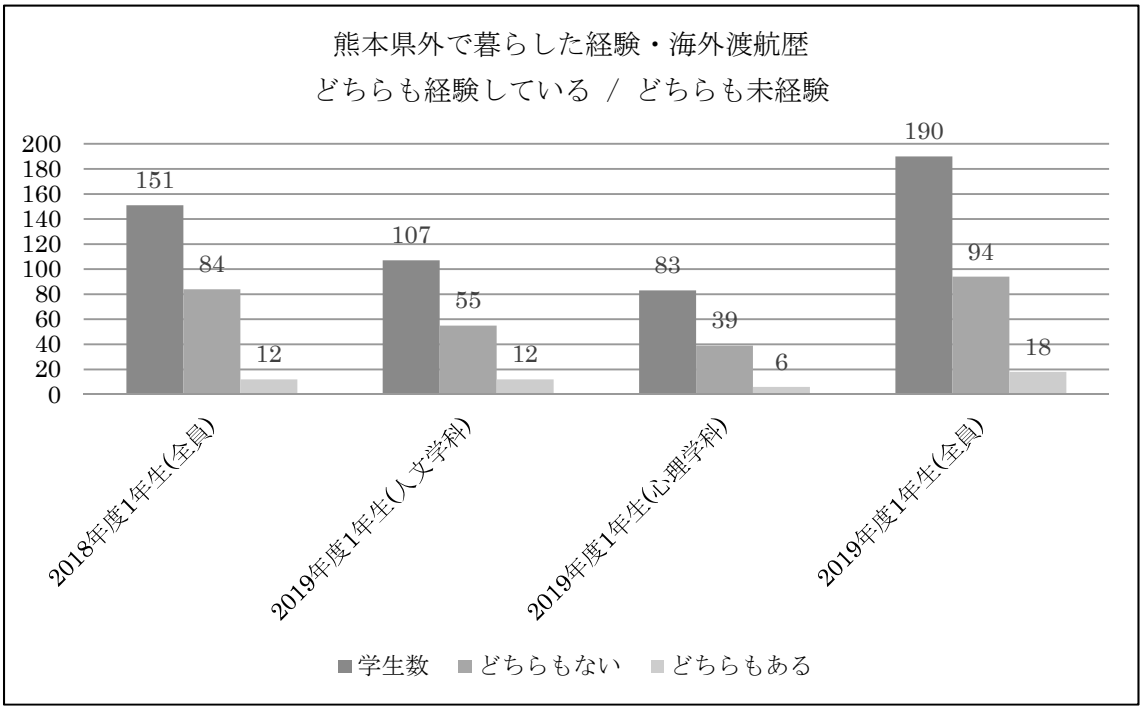

図６　県外で暮らした経験及び海外渡航の両方について

4.2.「異文化」の捉え方

次に、学生たちが「異文化」をどのように理解しているのかを調べるために、「現在、あなたの周りにはどのような異文化がありますか？」と尋ねた（表２）。こちらは自由に記入できるようにしたため様々な回答があったので、似た内容の回答はまとめて統計した。ひとつの回答の中に複数の意見があったものに関しては、他の学生と異なる意見はそのまま記載し、それ以外の意見については最初に書いてあったもののみを統計した。

最も多かった意見は「周りに異文化がない／異文化を感じない／わからない」又は無回答で、2018年度は37%（151名中56名）、2019年度は20%（190名中38名）だった。また、学生たちが異文化として捉えているものの中で最も多かったのは「キリスト教／礼拝」で、2018年度は約９％（151名中13名）、2019年度は15%（190名中28名）の学生が回答していた。多くの学生が本学で毎日行われている礼拝やキリスト教の授業を異文化として捉えていることが分かった。また、「クリスマス／イースター／ハロウィーン」とキリスト教に関連した行事を異文化として認識している学生も複数いた。

次に多かったのは海外の異文化や人々に関する意見だった。複数回答があった中で最も多かったのは「食文化（マナーや味付け、海外チェーンや外国人の経営する飲食店など）」についての意見だった。次に「言語」、「音楽」、「生活習慣やルール」に関する意見が続いた。また、外国人や海外に住んでいる人々との交流に関する意見も複数あった。「ALTを含む外国人の教員」、「友人が外国人／友人の親のどちらかが外国人」、「地域やアルバイト先に外国人がいる」、「親戚が海外に住んでいる」、「外国人観光客に向けたサービス（外国語での標識やアナウンス）」などの解答が多かった。身近な異文化として複数回答があったのは：「方言」、「クラスに他県から来た人がいる」、「食文化（味付けなど）」、「聴文化／ろう文化／手話文化」、「祭り／踊り／遊び」だった。

更に大学入学前の経験についても調査したく、「あなたが過去に体験した異文化にはどのようなものがありましたか？」と尋ねた（表３）。最も多かった回答は前の質問と同じく、「周りに異文化がない／異文化を感じない／わからない」又は無回答で、2018年度は約32%（151名中49名）、2019年度は約26%（190名中49名）だった。異文化として捉えているもので最も多かった意見は、2018年度は「食文化／味付け／食のマナー」が約12%（151名中18名）だった。2019年度に関しては、「外国人と話した／交流した」が約12%（190名中22名）そして「食文化／味付け／食の

表２　周りに存在する異文化について

４．現在、あなたの周りにはどのような異文化がありますか？

		2018年度	2019年度		
		全体	人文学科	心理学科	全体
		151	107	83	190
異文化がない／異文化を感じない／わからない／無回答		56	18	20	38
宗教	キリスト教（礼拝を含む）	13	13	15	28
	クリスマス／イースター／ハロウィーン	7	9	7	16
	宗教全般	4	1		1
海外の異文化	言語	7	6	2	8
	音楽	4	3	2	5
	肌や髪、瞳の色			1	1
	食文化やマナー、外国の飲食店やチェーン店等	13	6	9	15
	メディアで海外について知る機会がある			1	1
	海外のドラマやアニメ	2			
	生活習慣やルール	1	6	6	12
	外国人観光客	2	3	1	4
	外国人向けのサービス			1	1
	外国人の先生（ALTを含む）		4		4
	外国語での標識やアナウンス	3	2		2
	高校でグローバルに関わる学科があった		1		1
	教育が当たり前でない国がある	1			
外国の人々	親戚が海外に住んでいる／親戚に外国人がいる	1		4	4
	友人が外国人（又は友人の親のどちらかが外国人）	3	4	5	9
	クラスや学校に留学生がいた	2	2		2
	帰国子女の友人がいる	1	1		1
	地域やアルバイト先に外国人がいる	7	6	5	11
	お店に外国人の店員がいる	3	6		6
	本学の外国人教員	9	9	3	12
身近な異文化	方言	2		1	1
	クラスに他県から来た人がいる		4		4
	食文化：味付けや好み		1		1
	県内でも地域によって違いがある	1	1		1
	インターネット	1			
	聴文化、ろう文化（手話文化）	3			
	LGBT	1			
	祭り、踊り、遊び	2	1		1
	周りの友達やアルバイト先、部活で知り合った人たち	1			
	性別、年齢、職業、出身地の違いなど	1			

マナー」11％（190名中21名）だった。どちらの年度も学生たちが大学に入る前、高校生活の中や短期留学などの海外渡航の際に外国の人と交流した経験があることがわかった。

これらの回答から見えてきたのは、学生の大半が「異文化」と捉えているのは海外の文化や人々であることだった。「身近に存在する異文化」に気づいている学生はほんの一握りだったことも分かった。

今回の調査では学生たちに自由に意見してもらおうと選択肢を用意しなかったため、回答によってはどのように分類するのが良いのか明確でない場合もあったが、学生たちが「異文化」をどのように捉えているのか、またどのような体験があるのかを調べる目的は達成できたと考えている。

表３　過去の体験した異文化について

５．あなたが過去に体験した異文化にはどのようなものがありましたか？

		2018年度	2019年度		
		全体	人文学科	心理学科	全体
		151	107	83	190
異文化がない／異文化を感じない／わからない／無回答		49	24	25	49
宗教	キリスト教（礼拝を含む）	7	8	1	9
	クリスマス／イースター／ハロウィーン	4	7	2	9
	宗教全般	3	1	1	2
海外の異文化	言語	4	2	1	3
	食文化、味付け、食べ方や食のマナー	18	10	11	21
	生活習慣や考え方、ルール（トイレやお風呂の習慣なども）	10	10	7	17
	音楽、踊り、伝統芸能、衣服	2	1	2	3
	謝罪を軽々しくしない文化			1	1
	銃社会（アメリカ）	1			
	寄付文化	2			
	スポーツの礼儀の違い		1		1
	短期留学や就学旅行、旅行で海外に行った（海外在住も）	6	7	3	10
	ホームスティの受け入れをした		2	1	3
	外国の映画を観る		1		1
	高校で異文化について学んだ			1	1
外国の人々	クラスや学校に留学生又は外国人がいた	13	5	5	10
	外国人と話した、交流した	14	16	6	22
	親戚が外国人	3	1		1
	地域やアルバイト先に外国人がいる	2	1	1	2
	観光客に道を尋ねられた、話しかけられた	1	2	5	7
	外国人観光客	1			
	外国人の友人がいる			1	1
	外国人の先生（ALTを含む）	3	3	3	6
	友人が外国人（又は友人の親のどちらか外国人）			1	1
	親のどちらかが外国人のクラスメイトがいた		2		2
	お店の店員が外国人	1	1		1
身近な異文化	方言			3	3
	違う宗派の葬儀に参加した		1		1
	聴文化、ろう文化（手話文化）	1			
	祭り、踊り、遊び	1	1		1
	食文化の違い（朝食がパンなど）	4		2	2
	出身地の違い、価値観の違い	1			

５．異文化理解とアイデンティティ

人生の大半を日本という異文化圏で過ごし、常にマイノリティーとして生活してきたことや、国際的な環境で長年働いてきた経験を通して、異文化間コミュニケーションや異文化理解について多くの気づきを得ることができたと感じている。グローバルで活躍するには語学力だけでは不十分だということもその気づきのひとつだ。英語が全く話せなくても、外国人と心を通わすコミュニケーションができる人もいれば、相手の言葉が流暢に話せても、例えば人間力やコミュニケーション力、相手の文化や習慣を尊重していない場合だと、他国の人との関わりはとても希薄になってしまう。

異文化間のコミュニケーションにおいて語学力はとても大切なツールの一つではあるが、それ以上に

必要なのは、相手の気持ちや表現を理解したいと思う共感能力、自分が慣れ親しんできた環境や価値観と違う文化を尊重する人間力やソーシャルスキルであることも何度となく実感している。しかし特に日本においては「こうあるべき」ことが多く、多様性を受け入れ、変化に適応することが難しいことも多々あるだろう。筆者の経験から想定すると、その背景には、それまで行ってきたことや自分自身さえもが否定されると感じたり、異文化圏の人と関わる経験が極端に少なかったり、痛みを伴う（であろう）変化を恐れていることなどが影響している。しかし速いスピードで変化する社会に適応できる能力は、組織にとっても個人にとっても必然になってくるはずだ。今までの価値観ややり方を改め、これからの時代を生き延びるために何が必要かを自分たちで考える上でも、様々な異文化を知ることでヒントを得ることもできるだろう。

グローバルマインドを身に着けるためには海外に行く必要があるわけではない。海外に行けなくても、様々な違いに興味を持ち、自分と違う価値観や習慣、文化を持つ人々と関わることで視野は広がる。他者との関係においては偏見や差別が減り、お互いが尊重し合える人間関係が構築され、様々な選択肢が増え、自らのアイデンティティや生き方、居場所が見つかることにもつながると実感している。

６．おわりに

グローバル教育は外資系企業や外国人が多い地域で行うものでも、一握りの人だけが受けられるエリート教育に留めるのでもなく、誰もが必要な教育だ。しかし今までのように英語教育だけにフォーカスするのでは変化する社会のニーズに合わないだけでなく、他国との認識差が益々大きくなり、世界との距離が広がることにもつながりかねない。

今回の質問紙調査の回答からも見えてきたように、学生たちもアルバイト先や生活圏内の様々な場面において、様々な国の人と関わる機会が多くなった。また、今年の4月に政府が始めた新たな政策によって、外国人労働者の受け入れはさらに増え、行く行くは定住者も増えることになる。海外に行かなくても、今まで日本人しかいなかった地域においても在日外国人が増え、それに伴い外国籍の子どもも増え、社会の中で通用する様々な「あるべき論」が通用しなくなるだろう。これまでの常識や価値観、習慣やコミュニケーション手段を必要に応じて変えていく必要がでてくることが予想できる。そして、外国人労働者が日本語や英語でコミュニケーションができるとは限らないことを踏まえると、異文化理解は英語教育だけでは間に合わないことがわかる。これからは異文化の人々を受け入れる側の姿勢や理解力が益々問われるだろう。

これからのグローバル教育は外国の文化を学ぶだけでなく、先ずは自分自身を、そして地元や自国について知ることが必要であると考える。外国人と関わる際は更に、相手国と自国間の歴史や関係性についても正しい知識を持つことが重要になる。また世界や社会、そして身近な環境の変化にも対応できる力を養うため、他者も含め、様々な異文化に興味を持ち、学び、尊重できるようになることが求められているのではないだろうか。

引　用

グローバル人材育成推進会議　中間まとめ，2011. 6. 22　グローバル人材育成推進会議，pp.1
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy04/pdf/20110624/sankou2.pdf

グローバル人材育成推進会議　審議まとめ，2012. 6. 4　グローバル人材育成戦略，pp.6，8
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf

参考文献

原沢伊都夫．グローバルな時代を生きるための異文化理解入門，研究社，2013，pp.42

石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編．異文化コミュニケーション・ハンドブック～基礎知識から応用・実践まで，有斐閣選書，1997，pp.120-124